

最近のクマ大量出没と堅果類の豊凶について

福島県野生動物専門員 溝口俊夫

【クマの大量出没と堅果類の豊凶】

ブナ科の樹木にはブナ、ミズナラ、コナラ、クリなどがありますが、「ドングリの豊凶とクマの出没とは関係がありますか？」と尋ねられたら、勿論「イエス」ということになります。ただし、ドングリの豊凶は太古の昔からあることなので、今日のような大量出没は、農作物による人工的な富栄養化や里地に降りる行動の学習など、ほかの要因が加わっていることは言うまでもありません。でも、大量出没は年によって大小不規則な波があります。おそらく、この波の原因は、秋のクマの主食である堅果類の豊凶と大いに関係していると考えられます。堅果類の豊凶調査は、林野庁や（独）森林総合研究所などが主体になって、東北5県（なぜか福島県は調査対象地域外のような）や新潟県で毎年行われています。これらの調査によると通常ブナは7~8年毎に1回大豊作、ミズナラは数年に2~3回程度豊作となりますが、コナラやクリは比較的年次変動が少ないと言われています。

しかし、最近、ナラ枯れやクリタマバチなどの病害虫によってかなりの打撃を受けていることは明らかです。また、豊凶は地域一律ではありません。

今回、会津地方振興局が森林管理署や農林事務所などの協力ももらって20か所で豊凶調査を実施しましたが、やはり地域によって微妙に違いがあることが分かりました。

【クマの行動とエサとの関係】

さて、クマの行動とエサの関係ですが、とにかく夏は山のエサが一番少ないのは確かなようです。ですから、どんな年でも7月から8月にかけて里地への出没と被害がみられます。ここで一つ謎があります。秋の堅果類の豊凶を、クマは夏頃にはすでに予測しているようなのです。というのは、大量出没の年には夏の出没や被害がすでに倍加しているからです。それに最近の夏グマは痩せているどころか、里地に出没するクマの中には秋の終わりの頃のように丸々と太っているのを見かけることがあります。農作物を食べて富栄養化された個体だと思われます。

平常年では、9月中旬までにはクマは山に戻っていきます。反面、凶作の年では、栽培グリ、稲、ソバ、ニワトリ、蜂蜜、10月にはカキなどを求めて引き続き里地に出没するようになります。ただし、クマは秋にドングリばかりを食べているわけではありません。胃の内容物から、オニグルミの殻、サルナシやヤマブドウなどのいろいろな植物の種子、時にはカモシカの毛などが見つかったという報告もあります。それからクズの葉のかけらが見つかることもあるようで、クズは林縁に生える植物で、マントのように林の縁を覆ってい

ます。かつて開拓地だったところが放棄されたり、手入れのされない林の縁でよく見られます。いずれにせよ豊凶の波の大きいエサだけに頼ることがいかに危険であるかをクマはよく知っているようでエサを分散させていますが、栄養価の点ではやはり脂肪分の高いブナの実やドングリにかなうものはありません。実際にクマを飼育してみると、体重約 70kg のクマで春から夏季には約 2 千~2 千 5 百カロリー、秋になると 3 千カロリー以上にエサを 3 割ほど増量する必要があります。見ていると、まずお尻のところに皮下脂肪がついて丸くなり、さらに肩、最後にお腹周りに脂肪が付きます。ただし、これは冬眠させない場合なので、冬眠とさらに出産、哺乳の準備も含めるとおそらく普段の倍以上のエサが必要になるはずで

【大量出沒の原因】

さて、大量出沒の原因ですが、その年の堅果類の凶作だけではなく、前年の大豊作と連動しているという話があります。大豊作だと冬眠もうまくいくし、当然のことながら出産率、哺育成功率も高まります。こうして無事子グマが生まれたところで、次の秋はドングリの大凶作ではクマにとってはお先が真っ暗というところでは、おいそれと里地に出沒できない理由がありました。農地にはいつも人の姿があり、雑木林は様々に利用されていたし、スギやヒノキ林も手入れが行き届いていました。しかも、山奥までリゾート開発の圧力が加わり、しかも狩猟者の数もそこそこあって、それに山里では大切な動物性タンパク源でもあったはずで

ところが、平成になると状況が一変しました。実は出沒環境だけではなく、クマの捕獲方法にも大きな変化が現れました。ライフル銃と箱ワナの普及です。巻狩りのように人手も手間も格段少なくなった反面、クマへのプレッシャーが減りました。そして、平成 15 年、第 1 回目のクマ大量出沒が表面化しました。続いて平成 18 年には平成 15 年を上回る大量出沒が発生しました。箱ワナの設置標高が毎年 10 数メートルずつ低くなりました。山の中のクマの通り道ではなく、畑のすぐ近くに設置されるようになったからです。このころになると、クマの行動にも変化がみられるようになりました。早い年には 4 月頃から、里地でクマが目撃されるようになったのです。最初は夏の食害のための偵察行動かと思われましたが、特徴的なのは体長が 1 メートルかそれより少し小さいくらいの、年齢で言えば 1~3 歳くらいの若いクマがよく目立ちます。しかし、その季節はまだ畑には苗を植えたか、植えないかの時期ですから、エサになるものはほとんどないはずですが、足跡を見ると確かにクマのもので

そのうち、朝、通勤の人が道路を横切るクマを目撃するようになりました。クマの交通事故も増えました。さらに、昼間、市街地にも出沒するようになりました。そんな風ですから、昼間でも、畑のまわりの藪のなかにいるクマも増えました。畑仕事が一と段落して、どれ・・・ちょっと晩御飯のために山菜やキノコでも採ろうかと林の中に入って行ったらクマと鉢合わせというシーンも増えてきました。

【人身事故の特徴】

人身事故に遭われる方は年齢的には70~80歳台がピークです。若い人が畑仕事をやらなくなったという理由もありますし、若い就農者が商品作物の栽培をする場合などは大型トラクターなどに乗用しての作業ですからクマと出会うリスクは低くなります。実は、人身事故でお年寄りが多いという理由はもう一つあります。経験的に、こんなところに、しかも昼間からクマがいるはずはないと考えていることです。クマが顕著に里地に出没するようになったのはこの10年くらいのことですから、「いるはずはない」と思われるのも無理はありません。それともう一つ、地域内でのコミュニケーション力が低下しているのも、リスク情報をリアルタイムで共有できない理由のようです。

【新世代クマの出現】

このようにして大量出没が繰り返されるたびに、里地や市街地を行動圏の一部だと思う若いクマが増えました。少し前に母グマと子グマ2頭を一緒に捕獲して、電波発信機を付けて追跡したことがあります。何と！真っ昼間でも、市街地の近くの林に潜んでいたのです。悪い母グマなのか、それとも生きるためのギリギリの教育なのか、いずれにしても子グマは里地に降下することを学習したはずです。もはや「新世代クマ」と呼ぶしかないでしょう。ついでに嫌なことを言うと、自動カメラを設置してみると、明らかに箱ワナの意味を知っていて、絶対に避けているとしか思えないクマも増えてきているみたいです。中には、箱ワナにのしかかって遊んでいるクマも写っていました。

【情報を分析して対策にいかす】

こうしていろいろ考えてみると、人にとって不利な状況が重なって来ていますが、時代から考えるとバブルの崩壊と過疎高齢化の進行が根本あるような気がします。クマ問題は福島県だけの問題ではなく、全国的に起こっている問題です。だから、日本の大きな変化が関係していると考えられます。

西会津町では地域振興と被害防除は表裏一体として考えているという話を伺いました。言い換えれば、野生動物による被害の防除は、地域振興にとって必要不可欠な条件の一つだということです。とてもよい考え方だと思われれます。地域振興は地域力を生かした総合的な取り組みです。ですから、被害防除も、もはや捕獲というワンパターンではなく、いろいろな対策を総合的に組み合わせる必要があるでしょう。

それからもう一つ、情報を細かく分析して対策に生かすことも大切です。今回の豊凶調査もその一つに位置付けられるもので、クマによる被害防止のために今後も継続して調査を実施し、データを蓄積・分析していくことが必要です。必ず、地域における出没や被害の傾向との関連が見えてくるはずです。

最後に、失礼なのでとても大声で言えませんが、クマも学習しています。人間も対策を学習する必要があるのかも・・・。